

平成二十四年十一月十五日

高野山麓の天野なる丹生都比賣神社に詣づ。前々よりの希望はあれど、今年は殊更なる縁の有ればなり。神職を志す以前、國語問題協議會の主事として數年、余の事務局仕事の片腕を務めたりし上村知己君、今年四月よりこの著名なる神社の神職に奉職せり。その四月、「うたの寺子屋」なる古來日本の歌を和琴に合せ皆でうたふ會を指導する歌手藍川由美さんが參詣し、金幣なる「ぬさ」のお祓ひに「魂振り」の昂揚感を得たりと伺ひき。

十一月も中旬なれど、折よく紅葉の盛りに逢ひて目もあやなる境内の様に、まづ心躍れり。

紅だいたい黄色も點ぜる錦着てにふつ姫神心足る秋

朱の鳥居朱の太鼓橋朱の社殿まそほの世界空海が夢か

高野山との關はり深ければ、眞言僧の祈祷依頼の來訪も多かる由、神前にて般若心經聲出して讀める人々見受く。

神前に心經（しむぎやう）あぐるも似合ふ景にふつひめ齋（いつ）く高野の麓

上村主典、すでにこの七月より許されたれば、余がための祈祷受持ち、渾身の聲振りしぼりて祝詞をあげ、丹生津比賣神に祈請をなしたり。いよいよ金幣登場。見れば金色に輝く板の幾列か繋ぎ垂らせる御幣にて、主典擔ぎ上げて余の前に至り、力強き聲にて祭神に呼び掛け、そを振り始む。

さざ波か怒濤の響きか金幣の光と共に魂ゆるる聲

金のさね繋ぎて鎧（よろ）ふ心地して女神のまへに身振ふ我

そこにて思ひ出したるは前々日の樂曲がことなり。十一月十一日、大阪教育大學におきて「文語の苑 大阪シンポジウム」なる會、開かれたり。會場は近鐵大阪線の驛より登りに登り、エスカレーター三基を乗り繼ぎての、金剛山塊に連なりたる山の上の音樂ホールなり。

他の演題は今は措くとし、最後に行はれたるは音樂演奏にて、武滿徹が曲なり。「揺れる鏡の夜明け」と題せる提琴二重奏を、同大學を卒業してより佛蘭西にて音樂を學びたる藪田ひでみさんと、お茶の水女子大にて行はれたる「文語俱樂部 茶苑」の初代幹事田嶋眞貴子さんが演奏したるものなり。武滿が音樂は、「ノヴェンバー・ステップス」を聞きたることあるのみ。余は横山勝也の尺八を好みたれば、鶴田錦史の琵琶と共に紐育フイルハーモニックとこの曲共演して國際的にも武滿徹が名を世界に知らしめたことは聞き知りをりしも、變れる題名の音樂多きが印象に残れるばかりなり。横山や鶴田の長きカデンツァ部分には「圖形譜面」なるもの使はれたると聞くも常とは異なれものならずや。さはあれ、今回の二重奏には大なる感銘を受けたり、演奏者二人、時を得顔の外のもみぢにも紛らはるる華やかなる振袖を着、長き袖を天女飛翔のごとくに揺らめかせたることも一因なれど、弱音器をつけたる如き音、あるはハーモニクス、軋れる音の混

じれる倍音多きが、天上の樂のごとき超越的なる感を催させたる故なり。聞くといはむより、樂に載せられ、いづくにか運ばれゆく思ひをなせり。

燃えにもゆるどうだん躑躅ななかまどシンポジウムの熱氣を飾る

山上の最上棟にて音競ふ雅樂にまがふる二つの提琴

振袖の天女のごとく舞ふからにきしる音不協和音も天空の曲

さはあれど、ハーモニック音など、鏡の割れたるかと思像せしむるのみにて、曲名の「揺れる鏡」との對應なにつ感ぜらるることなしに曲終はる。翌日高野山に泊りその翌日、山を降りて丹生都比賣社にてお祓ひ受けし時にふと氣付く、金幣の祓こそこの曲名にふさはしからずやと。鏡とも言ひうる金の小札（こざね）のゆらめきて、がらこると鳴る音、鬱勃たる心に夜明けをもたらす。その結果としての天空の曲、武満徹生きてまさば、かが意圖乃至直観、いかなるや識りたきところなり。